

# 琉球大学学術リポジトリ

原稿：第一章 土地と種族 第一節 土地 第二節 種族

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2018-04-16 キーワード (Ja): 矢内原忠雄 キーワード (En): Yanaihara Tadao 作成者: 矢内原, 忠雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/38378">http://hdl.handle.net/20.500.12000/38378</a>



# 矢内原忠雄文庫

史料名	第一章 土地と種族 第一節 土地 第二節 種族
封筒番号	504
原文所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成 17 年 11 月 22 日
撮影者	富士写真フイルム 株式会社
備考	



# 矢内原忠雄文庫

封筒番号：504

史料名	第一章 土地と種族 第一節 土地 第二節 種族
資料形態	変形B4原稿用紙
枚数	31
頁数	31
縦 (cm)	
横 (cm)	
厚さ (cm)	
書誌的事項	植民？ この原稿がどの著作の原稿に当たるのかは、不明。  今泉分類記号：Y



渺茫たる太平洋の只中に星散著布する我輩  
任統治地域南洋群島に寄せては返す大波小波  
は今尚ほ千古の態を保つて居るが、椰子の樹  
蔭につつましやかに宮まれる島民の生活は外  
来者との接触により嘗ては夢にし考へられな  
かつた変化の跡を示して居るであらう。  
吾人のここに試みんとするはこの外來勢力  
の活動とこれによりて惹起せられたる島民の  
社会的経済的生活の変化、要するにこの地域  
を舞台とする植民史の叙述である。その中核

MARUZEN I

第一章 土地と種族  
第二章 沿革史



1/10



を為すものは資本主義的<sup>文化國民</sup>東姑的と非資本主義  
的原始種族との接触の結果たる社会的諸關係  
の分析をなすればならぬ。

第一章 土地と種族

第一節 土地

大小無数の島群を擁する太平洋南部を一般  
に南洋と呼ぶ慣はしになつて居るが、此処に  
散在する夥多の島嶼は大約三つの部分に分た  
れる。ポリネシア、ミクロネシア及びメウネ  
シア是である。而して本論の対象たる我委任  
統治地南洋群島即ち赤道以北の旧独乙領諸島



はミクロネシアの大部分に相当する。之を詳  
 言すれば、それはミクロネシア中一八九八年米  
 領となつたマリアナ群島の主島グアム、一八  
 八八年英領となつたギルバート諸島及び赤道  
 以南にあつて委任統治地となつたナウル<sup>(注)</sup>其の  
 他の諸島を除いたものである。<sup>(2)</sup>  
 我委任統治地たる南洋群島は東経一三〇度  
 より一七五度、北緯〇度より二二度に至る廣  
 袤實に南北十二百哩、東西二百五十哩に及ぶ  
 海面に散在して居る。<sup>(3)</sup> 之れは更に「マリアナ」

カロリン「マリアナ」の三群島に大別せ  
 られる。今群島別にその位置を見れば次の如  
 し

群島名	経度	緯度
マリアナ	自東経百四十四度 至同百四十六度	自北緯十四度 至同十二度
カロリン	自同百三十五度 至同百六十一度	自同四十二度 至同十一度
マリアナ	自同百六十一度 至同百七十五度	自同四十三度 至同十五度



自横浜 至マリアナ群島 サイパン島 一三五哩  
 自横浜 至西カリリ群島 パラオ諸島 コル島 一七二五哩  
 自ハルフルグ至

即ちサイパン島は横浜より 日、同じく  
 コロール島は 日の航程に在る。(此の莫  
 フにフハハは挿入地図を参照)

かく廣大なる 海面に散布する南洋群島所属  
 の島嶼数は六百有餘の多きに上るにも拘らず  
 それらの陸地総面積は僅に二、一四九平方キ  
 ロメートル、(約百四十方里)に過ぎない。

即ちそれは畧々我沖繩縣(一四四方里)又は  
 東京府(一三八方里)の面積と相伯仲するの  
 み。

群島名	島数	面積(平方キメートル)
マリアナ	一四	六三九(四一、四三) <small>(米領グアムを除く)</small>
カロリン	五四九	一三二〇(八五、五九)
マーシャル	六〇	一五〇(二二、三〇)
計	六一三	二、一四九(三九、三二)

以上の中主要島の面積のみを摘記すれば次



島名	面積 (平方キロメートル)
マリアナ群島 サイパン島	一八五 (二二、〇〇)
同 テニアン島	九八 (六、三五)
同 ロタ島	一二五 (八、一〇)
西カロリン群島 ヤップ島	二一六 (二四、〇〇)
同 パラオ諸島本島 (バンゲオブ島)	三七〇 (二四、〇〇)
同 コロール島	八 (〇、五〇)
同 アンガール島	八 (〇、五〇)
東カロリン群島 春島	二二 (一、四三)
同 夏島	九 (〇、五八)
同 水曜島	二三 (一、五一)
同 ボナ(島)	三七五 (二四、三四)
同 フサイ島	一一六 (七、五〇)
同 マーシャル群島 ヤルト島	八 (〇、五一)

の如し

主要島別面積

面積 (平方キロメートル)

又その相互的位置は東西南北に亘つて極めて

大洋の中心部にありて大陸より懸絶せること

吾々は以上五々の問題とする南洋群島が

て廣範囲に散在すること、而して其面積は



づれも小にして最大島たるパラオ本島です。二四方里に過ぎない事を見て来た。およそ此等の地理的事情が島民の社会的生活関係の特性を孤立性及びその保存に影響を及ぼせる事は想像するに難くない処である。

我南洋群島がマリヤナ、カロリン（これはいずれも東、西の両カロリンに分れる）マレーヤルの三群に分たれる事は後章沿革史に於て能く明瞭にあらう如き歴史の由來に基くべきである。これを現在の日本帝國の委任統治下の行政

支廳	支廳所在地	管轄区域
サイパン支廳	サイパン	マリヤナ群島一円
ヤップ支廳	ヤップ	東経百三十七度以東、西カロリン群島一円
パラオ支廳	パラオ	東経百三十七度以西、西カロリン群島一円
トラウク支廳	トラウク	東経百五十四度以西、東カロリン群島一円
オナペ支廳	オナペ	東経百五十四度以西、東カロリン群島一円
ヤルト支廳	ヤルト	東経百六十四度以東、ヤルツバル群島一円

南洋群島は大別して種類の地質的構造を持つ

吾々は次に此等の島々の地形を見よう。

一行アケ



つ、即ち高島 (Island) 及び珊瑚礁島である。マリアナ群島の諸島、並にカロリン群島中パラオ諸島及びクサイ、トウツク、ホナペ（以上火山岩）、ヤツプ（結晶変岩）の四島は前者に属し、其れ以外のカロリン群島の諸島及びマリシャル群島に属する諸島は後者の範疇に入る。而してマリアナ群島中北部に位置するウラカス、アソングソン、パガンの諸火山島は今尚ほ活動中である。

此等の諸島は其の火山島たるに珊瑚礁島たるに論なく、何れも陸地の周辺には縁礁を廻らし居る。尚ほ東カロリン群島のトウツク等は其の周囲に更に廣大なる保礁を有し、又マリシャル群島の如きは全く環礁のみから成つて居る。又諸島の地勢を見るに雪線以上の高さを有するものなく、概して低地にして傾斜は緩やかである。

此等の事情が島民の生活の特殊性及孤立性に上へた影響も亦少なくないと思はれる。例



へは其の周囲を閉す縁礁は外來者の侵入に對して自然の防禦壁をなしたてあらし、又其の地質及地形は前述の狭少なる面積と相俟つて天然資源の種類及數量に制限を附し、住民の経済的生活の内容及基礎を單純化し、規模をならしめたてあらし。

三

南洋群島はその位置赤道に近く所謂熱帶圈内に在るが、各島共面積狭小なるが故に、海風絶えず島上を吹き渡り、爲めに氣温は晝夜

並ぶに一年に於いて見ても變化が甚しい。其の最高温度は概して二十九度乃至三十一度を示すに過ぎない。又全群島を通じて降雨量も極めて多く、平均して年二十兆以上に達して居る。風はマリヤナ群島に於て稍強し事を除けば、他は概して弱い。南洋群島は内地台灣を龍巻風発生地とあるが、域内は於ては其の低氣壓は幼年期に属するもの多く、所謂暴風に達するものは甚しい。唯島嶼の狭小低平なる爲め、一旦暴風の襲來を受つると比較的



甚大なる被害を興へられた。数次の暴風が直  
接間接に入口敷に破壊的影響を与へ七島に關  
しては後に述べる如きがある。暴風中有名なる  
ものは、古くは一九〇五年一九〇七年、新し  
きものには一九二五年一九二七年の如きがあ  
る。

以上の如き氣候を健康上より考へるならば  
熱帯地としては健康地と言ふ事が出来よう。  
特に其地にはマラリヤ傳染を媒介する  
樹島せず。従つて熱帯地特有の風土病たるマ

ラリヤを缺いて居る事は注目するに足る。  
四

次に南洋群島の動植物について、それが島  
民の生活に影響を及ぼす限りに於て簡単に觸  
れ置くが。

先づ植物を見るに、前述の様な豊富なる降  
雨量と高い温度に恵まれて植物の繁茂は旺ん  
である。就中秀でて居るものはパンの樹及椰  
子樹で、これより採れるパンの実及椰子の実  
は、夕口芋菜と併せて島民の主食物となつて



居る。又椰子の實の生産物たるコブラは此の地域の最も重要輸移出品を成して居る。

轉じて郵物を見るに、魚類は極めて多い。

然し漁場の法は幼稚であり、唯極めて多數の

海島が生擣する為アングール、ペリリユウ、

トコベ、フハイスの諸島に燐鑛を産するを

見る。又家畜（主に牛、豚、鶏）は始めスペイン人

により輸入されたものであるが、比較的潤沢

に供給せられるに至つて居る。



第二節 種族

南洋群島島民の種族的關係は極めて錯雜し  
て居り、其の研究は例へば東北帝國大学の長  
谷部言人教授の如き有力なる學者に依つて尚  
ほ續行せられ居るが、現今では曰未だ其の  
混血の順序系統に關する學說を確定するもの  
は少ない状況にある。これ故若し南洋島民  
の種如何なる問に對して一括して答ふる事  
を要求せられるならば、吾々は次の如く言ふ  
以上は出來ないであらう。曰く「ミクロネシ

アは東西南北からの人類の全この原始的部  
の合所であり、<sup>(2)</sup>此の諸島に居住する人間は  
四隣民族孰中ポリネシア、メラネシア、アレ  
シネグリトの雜種云、<sup>(3)</sup>地方に依り其の原種及  
混血の程を異にす<sup>(3)</sup>と。  
吾々は以下可能の範圍に於てこの問題に關  
する諸說を比較研究し、其の結果の綜合を試  
みて見よう。今、これに關する諸說を概観す  
るに、大約二つの見地に分れると思ふ。即ち  
人類學的見解と民族學的見解之である。



1. 人類学的見解

諸家の説を瞥見するに、ミクロネシアの原住民を以てネグリトであるとする莫には異論がない好である。唯一般に其の原住地並に移轉の経路については論述を缺いて居るが、或學者は其の發祥地を南部アビアに求め、此處よりミクロネシアに流入せし事を説いて居る。此の原種族に追加せられた要素については混血の順序は論者により一定する所がある。好であるが、免に角南方からはメラネシアの要素がつけ加へられ、又東方或は西方からはポリネシアの要素がつけ加へられた事を説く。莫に於ては概して一列して居る好に思はれる。尚大多數の論者はミクロネシア人種の中にフィリピン其の他を通過して傳つたマレ島の要素を認め、莫に於ては軌を一にする。唯前述のポリネシアの要素とマレ島種族との關係については説が同じでない。或論者はマレ島種族の一派がマラッカ半島より運動を起し、漸次東遷したものがミクロネシア中のポリネ



ニア要素であるとは仮定し、従つて此のホリネ  
ニアを以て直ちにマレ一の要素と考へるの  
ある。(7) 然るに之に反し若し此のホリネニア要  
素を以て、たとひその始源地としてはマレ一  
と同じ地域に運動を起したにせよ一度ホリネ  
ニア独自の地域に定着し独自の文化を發達せ  
しめたる後、逆に東より西に向つて再度運動  
を起しかくミクロネニア種族の構成に影響  
したと考へる論者は、何れの時にかこれとは  
別のマレ一要素の流れがフリーツピン方面より  
来つてミクロネニア中に混入したるものと思  
定する。(8) 更に或る論者は前説を肯定し乍らも  
其上更に再びフリーツピンを超えて傳はれる  
マレ一の要素を認めんとし居る。(9)  
上述の諸要素の混血の混血が今日のミクロ  
ネニア族を形成するに至つたのである。  
次に此等の諸要素の移動並に混血の方向は  
如何なる原因によりて決定せられしやの問題  
にツイては、或る論者は海流に依るとし  
又或る論者はマラリヤ病に対する抵抗力の差



に依ると有すか、此の實に就ては前の問題以上  
上に学説は区々を極め居る。殊にマレーヤ  
ル群島に古くから發達して居る航海術等考  
慮に入れる時、海流による漂着のみを以て決  
定的要因と有す事は或は困難かと思はれる。  
以上吾々は従来の諸学説を概括したるであ  
るが、前述した長谷部言人教授に依り今日此  
の方面の根本的研究が有せられたる。最近  
其の結果が取りまとめ發表される筈である  
といふが、現在迄に發表された部分について  
教授の説を紹介して置きたい。蓋し教授の研  
究は此の方面の最も新しい、総合的のものであ  
る。  
教授は先づロネーシア人が周用の木  
リネーシア、メラネーシア、インドネーシア  
人とならざる人種関係にあるか、如何なる経  
路によつてここに出現するに至つたかを論ず  
るには、先づ全群島に亘つて島民の身性を視  
察し、地方差異を明かにする必要がある。な  
され、前後三回に亘る旅行に依り四千七百餘



人の成年男女島民の身体を精細に調査された  
 。而して身長、頭示数、顔示数及び鼻示数  
 の四項を総合し、南洋群島に凡そ四種の体  
 型と其の中間型を分つて居られる。今此の四  
 種の体型を仮にカロリンA型、カロリンB型  
 、インドネシア型、ポリネシア型と名付  
 けるならば、其の男子に於ける特徴は次の様  
 になる。  
 ①カロリンA型は身長概ね一六〇糎以上、  
 それよりナシ低いものも多少はある。頭示数  
 六七未満即ち長頭で、形態の上顔示数八八以  
 上即ち狭顔、鼻示数八五未満即ち中葦若くは  
 狭鼻である。  
 ②カロリンB型は身長一六〇糎未満、頭示  
 数七六未満、顔示数八八未満、鼻示数八〇以  
 上即ち概ね廣鼻である。A型と頭示数一致  
 するも身長小にして顔と鼻の幅廣き点でこれ  
 と異なる。  
 ③インドネシア型は身長一六五糎未満、頭  
 示数七六以上即ち中葦又は短頭、顔示数九三



未満即ち甚だ狭長なる顔をも有するものはなく  
 カロリンA型にかかるとのものが往々あるのと  
 異なる。鼻高七〇以上即ち中等又は広鼻の狭  
 鼻なるはない。かかる体型は印支洋諸島人に  
 普通なるを以て斯く名づけたのである。  
 ボリネージア型は身長一六五種以上即ち日  
 本人の身長平均値より約一寸高し。これを最低  
 と定めたのである。頭高七六以上中又は  
 短頭、顔高八八以上は狭顔鼻高八五未  
 満即ち中等又は狭鼻である。

インドネーシア及びボリネーシア型のカロ  
 リンA B型と異なる。主として前者の頭は短  
 後者の狭長なる事である。ボリネーシア型  
 は一見カロリンA型に似て顔狭く鼻も狭いが  
 前者は身長大にして短頭、後者は身長中等  
 にして長頭なるを著しい差異とする。インド  
 ネーシア型はカロリンA型と種々異なる。  
 前者に比して後者は身長少しく高く長頭  
 顔狭く鼻も狭い。カロリンB型はインド  
 ネーシア型に似て鼻も広いが、身長これよ

りも小頭が長い。



ロ、民族学的見解

一般に風俗、習慣、文化等言ふものは、  
おしも種族の範囲と一致するものではなく、  
屢々此の範囲を超へても傳播されるを見  
るのであるが、現今迄行はれた我南洋群島に  
関する民俗学的見地からの研究の結果は大  
体にして人類学的研究の結果と一致するが如  
くである。

今其の一ニの説を紹介しやう。

ムグレーブナーの文化圏説 (Mulleur von der Kultur-Reisung)

其の大意を摘記すれば此の地域に於ける最  
古の文化圏は黒人文化であり、原始オースト  
レリヤ文化が之に含まる。これはミクロネ  
シアには明かには現はれて居ない。之に次ぐも  
のはパプア文化である。之は時期の前後に依  
り西パプア文化と東パプア文化に分たれる。  
此の中前者はミクロネシアの西部に保たれて  
居る。其の証據は社会組織としてパウチ諸島  
に存するトーテキ組織、又内文化財について  
はヤウポバウオの竹の小刀石の夾を持つ矢筈



である。後者はミクロネシアの東部に見られ  
る。其の特徴はカロリン群島中のクサイ島に  
於けるニ部族制度（*Two-tribe system*）  
又中央カロ  
リン、トラツク島に於ける覆面舞蹈等である  
。パプア文化に續くものはメラネシア文化で  
あり、之は西部に強く現はれる。其の特徴は  
東部ミクロネシアに於ける皮張りの太鼓其の  
他竹の櫛等である。オーストラリアに來る者は初期オ  
ネシア文化であつて、この文化は二十世紀に  
至つても尚ほ太平洋島嶼の大部分を支配するも  
のの如くである。この文化の特徴は漁獲具と  
か、又社会的制度に於ては住民の身分別タブ  
のの習慣に見られる。此れに北オネシア文  
化南オネシア文化の二つを分つ事が出来る  
のであるが、殊に前者はハワイ、タヒチより  
マレーヤル、オナペ更にマリヤナ群島に至る  
迄の間にも擴つて居る。而して此の文化の担  
当者たるオネシア人は恐らく南部オネシア又  
はオネシアピンカウメラネシアとミクロネシア



に来たものらし、いかに此地には永く駐る事は反  
かつた。ともし、ポリネシア人が決定的に定住  
した地、即ちポリネシアから、新ポリネシア文  
化の反作用がメラネシア、ミクロネシアに傳  
はり、西方ではトラツクから十モイ、又、オ  
ル、トビ等に迄及んだ。  
最後にアジアの影御も発見される。これ  
はミクロネシア全体に傳つて居る。其の著し  
い特異はカロリン、マリヤナ兩群島の織機、  
ヤツプの貝貨等に見られる云々。

2 松岡靜雄説

松岡氏の説かれる如き主張は注目する  
同小異であるが、唯次の如き主張は注目する  
に足りやう。即ちマリヤナ諸島に保存せられ  
た古記録に依れば、マリヤナ群島を占據した  
人民が嘗てはミクロネシア全体の支配者であ  
つた様で、彼等はメラネシア、ポリネシアの  
植民前にインドネシア諸島からフリツピンを  
經て北上したのである。而して此のチヤモロ  
族(?)は航海術に長じて居り、又比較的な文

化を有つて居たが、南方諸島に伸ぶ所在の支住(東京文房堂製)民と混血し  
てカロリン民族が生成したのである。云々



南洋群島の島民は社会的にはチヤモロ族と  
 カナカ族とに分たれる。この区別は「ヤホシ  
 も人種の如何を意味するのではなからしといふ  
 」。即ち前項に於て述べしたる自然的人種の区  
 別に基くものではなくして、寧ろ文化程次に  
 於ける島民の区別である。前者の人種的区別  
 たるに對し之は社会的区別である。前者の自  
 然的所産たるに對し之は歴史的所産である。  
 これは自然科学的には重要なりが、或は意

味無き区別であるかも知れなから、吾々の研  
 究の對象たる社会上の問題としては最も重要  
 なる歴史的区別である。而して我政府の統計  
 其他とし之は最もチヤモロ、カナカの区別  
 を用ひて居るのである。

チヤモロとはマリヤナ人の別名で、詳言す  
 ればマリヤナ群島土着の島民に對する呼稱で  
 ある。本来のチヤモロの生活は裸体で結婚し  
 女は現今高ヤツに於て見られる如き大き  
 な腰籠を纏ひ、好んで檳榔子を噛み、巧みに



カヌーを操り、踊を樂しむなど、此等の貞全  
くチヤモロ以外のもの即ち所謂カナカと  
も  
選ぶ所はなかつたのであるが、二百三十年程  
前トスペイン人の為め全民悉くガア4に集め  
られ、キリスト教の規制の下に其の生活を改  
めると同時に、支配者たりし西班牙人等と著  
しく混血したのである。斯くて今日のチヤモ  
ロはチヤモロ本然のもの即ちマリアナ固有民  
とは異なるものとなり、ロタ島に於ける極めて  
少數の者を除けば、純粹のチヤモロを祭見す  
る事が出来なくなつて了つた。今日のチヤモ  
ロは概ねメスチソ（西班牙人とチヤモロとの  
混血児の流を汲む。現在ガア4以外の島々に  
居住するチヤモロは十八世紀後更めてガア4  
から移住したもので、それも古くはロタに限  
つた。サイパンその他のものは十九世紀に至  
つて始めて移住したもので、此処のカナカよ  
り寧ろ新らしいと思はれる。

はれるが、我邦に於ては往々マーシャル、カ  
次にカナカとは布哇語を人を意味すると言



コリン人を指稱するにカナカ有る語を用いて居る。今其の由来を棄するにサイパン島に於ける先住の島民カロリン人と十九世紀に至つて更めて比処に渡來した文化程を主キチヤモロ人とを区別し差別待遇するの必要上用ニられ<sup>た</sup>ものガ<sup>ハ</sup>され<sup>ル</sup>に至つたものニハ<sup>チ</sup>チヤモロ<sup>ク</sup>カ<sup>ニ</sup>。其れ故に論理的に考へるならば<sup>松岡氏</sup>の言ふ如くチヤモロ以外の島民はカロリン人と認稱するか、又は長谷部博士の説の如く各其御島に從つて呼ぶを可とするかも知れぬが、吾々はチヤモロ、カナカの区別が單に名國上行政上の便宜を有するのみならず、後述の如く實質的の文化程度の差<sup>異</sup>を示して居ると思はれるから、吾々の研究の主要目的に照して此れを踏襲した<sup>ハ</sup>意向である。蓋し吾々の研究は要するに文化段階を異にする植民國民と在来島民との接觸によりて生ずる社會的關係にあるから、歴史の成果たる文化程度の差異に基くチヤモロ、カナカ<sup>の</sup>区別は他の如何なる自然科学上合理的なる島民の分類よりも<sup>邊</sup>が



に合理的合目的たるものである。植民國民たるドイツ人若くは日本人と島民との接觸を調査研究するに當りて植民國民對チヤモロと植民國民對カナカとの間には何等かの程々に於て結果の相違が豫想せられる。又植民の島民に及ぼす影響よりいふも、植民政策の立つ方よりいふも、チモロとカナカとでは何等かの程度に於ける相違が豫想せられる。植民國民に對する文化段階の近接程度如何は原住民政策の社会的基礎を為すものであるから。

物て前述の様は現在のチモロ族は早くから西班牙人と接觸混血し、それに依る生活の欧化キリスト教の影響等を受けたるもの、大体に於てカナカよりは其の文化程交が高い。勿論其の差異は相對的なるものであるに相違なく、此處では出來得る限り個々の實を比較して見よ。

チヤモロ族はカナカ族の懶惰なると異つて其の性温順勤勉であり、又其の容貌風俗も補カナカ族に優る様に見える。しかのみならず亦



衣食住に於ても欧化の程度著しく、カナカ族とは此等の莫く趣を異にして居る。先づ衣服を見るに、チヤモロ族は男女共洋風の衣服を纏ふて居る。往昔より歐洲人に接觸する機会が多かつたマーシャル群島に住ち東部カナカ族の一部にも此の習慣が認められるが、カナカ族の大部分を占むるカロリン群島に於ては裸体の者が多い。轉じて住居を見るに、南洋群島に於ける島の民の住居が一般に粗雑簡單なる中に在つて、チヤモロ族の多くは木造又はコンクリート重鉛板葺の洋風家屋に住し、殊にサイパン島に於けるチヤモロ族に在つては洋風コンクリートの家屋軒を連ね集つて一街を成して居る現状である。又中にはピアノの如き樂器を備へて居る者も見出される。兩族の文化程度の差異は唯に斯うした衣食住の莫大に不同より根本的な社会制度にも現はれて居る。即ち一般に發達段階の低い島民の間には未だに昔の氏族制度の遺風が根



強く支配して居るにも拘らず、チヤモロ族に在つては早くより西班牙人の感化を受けた為め既に比族制を脱し純然たる家族制に移つて居る。かくの如くチヤモロ族カナカ族の兩者の間には相当大なる文化程度の差異が存する。而してチヤモロ族はカナカ族に対して優等人種の自覚を持ち、何事についてもカナカ族と交渉する事を恥とする風があり、兩者は全く没交渉の生活を為して居る。従つて兩者互に結婚もせお、日常生活に於て殆んど交際する事もなく、さりとて兩者の間に競争衝突反目の事實もない。後述で明かな様にサイパン島以外は殆んど大部分カナカ族が居住しチヤモロ族は少数であるが、兩者は各別に集團部落を形成して、曾て征服被征服の關係に立つた事はない。尚兩者は行政上法律上は共に島民として平等に取扱はれ、兩者の間に差別的待遇を為されず事はない。蓋し兩者の間に文化程度の差異はあるけれども、行政上法律上の



差別取扱を為すを必要とするほどの差異あり  
わけをなく、統治國民たる日本人の文化程度  
に對する距離より見れば千ヤモロといふカナ  
カといふも五十歩百歩の差に過ぎないと言ふ  
得よう。

三

最近の島勢調査（昭和五年、一九三〇年十  
月一日）によれば南洋群島の總人口六九、六  
二六、その中千ヤモロ三、三〇一人、カナ  
カ四六、三九四人、邦人一九、八五人、外

國人九六である。而して人口密度は一千料に  
付三二人である。（同じ年の内地の人口密度  
は一六九人を示す。）

今大正九年を初一回として昭和五年迄に五  
年毎に行はれた前後三回の島勢調査の結果に  
基いて、千ヤモロ、カナカ邦人外國人の區別  
による現在人口の比較並に地理的分布を見  
るに次表の如くである。

（挿入×頁参照）



次に吾々は出来得る限り次章との重複を避けつつ、過去に於ける島嶼間人口移動及増減の跡を辿らう。

南洋群島は相当地早くから歐洲人の觸るる所となり、その影響若くは政策の下に住民の島嶼間移動及増減が行はれた。而して之をスペイン領時代及ドイツ領時代について見るに、各々特異の色彩と政策の下に遂行されたのである。

スペイン時代

スペイン治下に於ける住民の移動は夙に一六七〇年代に遡る事が出来、其の最初の地盤となつたものはマリアナ群島中の諸島であつた。前述の様にはマリアナ群島は元来チャモロ族の住地であつた。一六六五年に於てはサイパンに住むチャモロ族のみにて一〇〇〇人乃至三〇〇〇人に達したと稱せられる。然るに主として宗教的原因に依るスペインへの反抗の爲、早くも一六七二年一月の間に



にグアムに於て多数の島民が失はれた。更に  
五年後に起れる反抗の結果サイパンにても殺  
戮あり、その生残者はグアムに隔離される運  
命に遭遇した。<sup>(3)</sup>  
一六九五年にキロガなるもの島民統帥上所  
謂集中政策を行ふ爲めに、サイパン以北の住  
民は全てサイパンに、又テニアンロタ西島の住  
民は之をケアムに集めた。而るに此に後れる  
事三年にしてマドラオオなる者が此の一度がサ  
イパンに集められた島民をも亦グアムに移し  
た。爲めにロタ以北のマリアナ諸島は無人境  
と化した。唯キロガの時に逃げ残り又マ  
ドラオオの強制移住にも難を免れたチヤモ  
ロがロタに引續き住んだ爲め、今日でもロタ  
に於ては比較的純粹のチヤモロを見出す事が出  
来るのであるといふ。<sup>(4)</sup>  
抑て斯くグアムに集中されたチヤモロはキリ  
スト教の影響を受け、又スペイン人との混血  
が行はれると同時に漸次人口を減少して行つ  
た。即ち一七一〇年には其の数は三、六七八人



一七六〇年には一、五四人更に一七九〇年に  
 は一、六三九人を示して居る。其の後の移動を  
 サイパンのみについて見るに一八四〇年代に  
 はカロリン人（所謂カナカ）が大挙来住し又一  
 八六四年には四二四人のカロリン人と九人の  
 チヤモロ人が来住した。其の他のマリアナ諸  
 島に~~航~~<sup>航</sup>すも畧々同様の経路を辿つたものと思  
 はれる。  
 マリアナの諸島以外に於て注目すべき事件  
 は、一七八〇年代に英船アンテローデ号のバ  
 ラオ来航に伴ひ勃発した内紛の爲の島民の死  
 傷、一八五四年英船デルタ号に依り黒天然痘  
 の輸入に依り惹起された和ナペ島民の死亡、  
 又一八八七年より一八九九年に亘つて同じ和  
 ナペ島に起つた土人暴動の死傷甚である。之  
 等の爲めに島民人口を減じたことは言ふ迄  
 もない。  
 同じスペイン時代に遂行されたものとして  
 異色あるものは、一八七〇年にマレーヤル群  
 島中の一島ウゼランが暴風に依つて大害を蒙つ



た結果、一八八〇年代に二〇人の島民をヤル  
トに移した事件である。  
ドイツ時代  
ドイツ時代に行はれた島民移動は主として  
相次いで勅発した数次の颱風に依り蒙った禍  
害を緩和するゆ要からなされた。  
即ち一九〇五年の風害の結果カロリン群島  
の一島ピンゲラフから六七人がサイバンに移  
った。又同年の風害の結果ハリロの住民は十  
五人を残して大部トラウクに移った。  
一九〇六年には政府の命令でカロリン群島  
中比較的人口過剰なるモグモグ、ソソル、  
ブル、メリ、トビの諸島より数百人をパ  
ラオ及サイバンに移住せしめた。  
一九〇七年には颱風が襲来し、其の甚  
果新たに大規模の移動が行はれた。即ちサト  
アン、ルクノ、エタル三島合計二四〇〇人  
がオナペに移され、其他右三島に於ては颱風  
害の爲めにニ七人が斃れて居る。又やはり  
風害緩和のゆ要上オライ、モグモグから合



計一五ニ八人をトラウク、ホナペ、サイバン  
に移植した。  
以上の外ドイツ時代には寧ろ例外的  
原因に基く島民移動の事例は、一九一〇年ホ  
ナペ島に於けるジョカチ暴動の結果として、  
ジョカチ<sup>チ</sup>任民を全クパラオに送つた事である  
。以上大体に於てスペイン時代の人口移動は  
叛乱の鎮圧及処罰として統治上の必要より出  
てたる政策的島替へてあり進放であつて、た  
だ例外的に暴風被害の救済としてこの移住の一  
例を示すに對し、ドイツ時代には風害の  
救済を目的とする移住政策を主とし、例外的  
に叛乱処罰としてこの政治的島替の一例を有  
する。而して日本治下に至つては政策的意味  
を以て島民の強制的移住を行つた事は無い。  
蓋し政情既に安定して島民の叛乱暴動を取  
するもの無く、又経済的に各島の土地と人  
口との調和がほぼ平均するに至つた事が爲め  
である。